

(目次)
第二章 パーティーにて

軍事情報の収集という仕事に比べ在米ユダヤ人など民間人との交際は『シャイ・ロック』の苦手であった。軍事関連の話題なら流暢に受け答える彼も、世間的な話題になると途端に舌が滑らかに動かない。元来口下手なだけに多弁でジョーク好きなアメリカ人を相手にすると一方的な聞き役に終わってしまう。相手から人気のテレビ番組についてどう思うか、と感想を聞かれても満足に答えられない。何しろ彼は騒々しいだけのテレビのホームコメディには興味が無いうえ、毎晩本国への報告書作りに追われテレビを見る時間など無いのである。米国のテレビ番組をチェックするのは本国の外務省から派遣された職業外交官に任せれば良い、と彼は思っている。

しかし大使は『シャイ・ロック』にパーティーに出て米国の民間人と積極的に交われ、と命令した。米国の誰もが第三次中東戦争をわずかの日間で終わらせ圧倒的に勝利したイスラエル、そしてその立役者となったイスラエル空軍の活躍ぶりを知りたがった。その中心にいたのが今回赴任してきた駐在武官である、という噂はワシントンの外交団や国会議員、果ては在米ユダヤ人にまで瞬く間に広がった。

彼の話が聞きたいという声が大使のもとに殺到した。彼は「歩く広告塔」だった。大使は着任早々の彼を執務室に呼び命令した。

第二章
第一部
第二章
米国人達に多大な感銘を与えることは間違いない。米国人は単純で勸善懲悪の話が大好きだ。つまり今回の戦争ではイスラエルが善人でアラブが悪人だ、と言う筋書きは

(目次)

どヤンキーたちに解りやすい話はないのだ。」

その時『シヤイ・ロック』は大使の言葉に多少の違和感を覚えた。彼とてアラブと戦う自分達が間違っていないと信じている。しかし戦争に善も悪もないという気持ちもある。戦争は勝つか負けるかしかない。だから戦う以上は勝たなければならぬ。彼はそう思った。

「それだけではない。在米ユダヤ人たちが君の話を聞けば奮い立ち、全米からさらに多くの献金を集めてくれるだろう。本国の財政は苦しく米国にいる豊かな同胞は何よりの味方だ。彼らの財布のひもをゆるめさせることが貴官の駐在武官としてのもう一つの役割だ。そのことをよく肝に銘じてもらいたい。」

『シヤイ・ロック』の違和感もそれまでだった。もともと上意下達の軍隊の世界で育ってきた彼には上官の命令は絶対である。大使館はまさに軍隊と同じで、大使は最高権力者であり、大使の命令にはナンバー2と言えども逆らえない世界である。外務省出身者が幅を利かす大使館では、国防省から派遣された武官の彼など一兵卒に過ぎない。大使の命令に服従するのは自然な帰結だった。

第二章
マン、米国の軍人たちがいつも群がり彼は何度も何度も同じ話をさせられた。未明にシナイ半島のエジプト空軍基地を叩いた話、ゴラン高原を低空でシリアに潜入して同部の基地を攻撃した際のあつけないほどの戦果、相手の対空砲火を避けるため超高空で敵地に潜入し、目標近くで一気に高度を下げると再び超高空に舞い戻るハイ・ロ

(目次)

ー・ロー・ハイ作戦など時には戦術用語を交えた彼の語り口は聞き手を魅了した。

当初口下手で相手にうまく伝えられなかった『シャイ・ロック』であったが、何度も同じ話をしていくうちに次第に話しぶりは滑らかでよどみがなくなり、時には聴衆の感動と笑いを誘うエピソードをはさむ余裕すら生まれてきた。かつて独立戦争の闘士であった父親が彼に何度も同じ武勇談を語ったのと同じように……。

ただ違うのは父子二人の時は聞き手は彼一人であったが、今は周りに大勢の聴衆がいることだ。聴衆の中には既に彼の話を聞いた者もいた。しかしそのような者たちは彼が同じ話を始めると、そつとパーティーの輪を離れた。くまたその話ですか、などと言う野暮な茶々を入れないことがパーティーにおける礼儀というものだ。彼の話を始めて聞く人間だけが彼の周りに輪を作り彼の話に興味に熱心に耳を傾けた。

彼らは別な日に別な場所での話を話題に取り上げ、アラブを敵に回して連戦連勝したイスラエル、と言うイメージをふりまいていった。アラブ人に生理的な嫌悪感を持つ白人たちにとってその話は騎兵隊がインディアンを撃退する痛快無比な西部劇の映画そのものだったのである。彼の話を聞いたと言って献金を申し出る在米ユダヤ人が続々とあらわれた。大使の狙いは的中した。

第二章 第二部 第二

ある日のパーティーで彼は米国軍人の夫人たちに囲まれ話をせがまれた。彼の話が好きなのは男性だけではない。女性にとっては話の内容だけではなく話し手の容貌も重要だ。男盛りの引き締まった顔、軍服に身を包んだ凛々しい姿、物静かだが内に秘めた情熱。彼の全身からにじみ出る男臭さが婦人たちを魅了した。彼女たちはまるで

(目次)

ハリウッドの有名俳優に会ったような憧れの眼差しで彼を見つめていた。

女性ばかりに囲まれ熱い眼差しで見つめられ、いつもとは違う雰囲気に彼は少しばかり緊張した。話し馴れたはずの戦争の話も時々言葉がつかえ、一瞬の沈黙が生まれる。内気で頑固な彼本来の姿が顔をのぞかせた。夫人たちはその一瞬を見逃さない。噂どおりの男だと知って夫人たちは安心すると同時にますます食い入るように彼を凝視するのであった。

実際のところ彼女たちにとっては20数年前の第二次世界大戦或いはその5年後の朝鮮戦争について夫たちが語る武勇談はもう聞き飽きていた。気の抜けたシヤンパンよりも始末が悪い。それでも夫たちはパーティーで飽きもせず同じ話を繰り返して女性たちをうんざりさせていたのである。

時代は朝鮮戦争が終わり冷戦の真っ只中であった。1960年に米国の目の前のメキシコ湾でキューバ危機が発生し、世界中が緊張したが米ソの衝突は瀬戸際で回避された。さらに数年後ベトナム戦争が起こったが当初米国内では全く問題視しなかった。東南アジアの貧しい国のゲリラ活動など、米国から見れば物の数ではなかった。後日この戦争が米国人の心に大きな傷を残すとは思いもしなかったのである。米国はソ連との冷戦の対決に全神経を注いでいた。

第二部第二章

戦場で砲弾が飛び交う本物の戦争と異なり冷戦では紛争当事国以外の国では軍人の出番がない。特に現場の将官クラスがそうである。冷戦はスパイが暗躍する謀略戦

争である。謀略戦争の影は次第に軍の内部にも浸透し始めた。そこでは頭の切れる、要領のいい将官が出世する。民間企業に例えれば、最前線の営業部隊より、本社の戦略企画部隊が肩で風を切るようになった。民間企業のような売上とか利益と言った明確な目標がないだけにかえって始末が悪い。ライバルのソ連と正面から向き合うのはペンタゴンではなく、外交を一手に取り仕切る國務省であった。

ジョンストン空将の妻ヘレンは夫や夫の同僚たちに幻滅していた。抜群の反射神経を持ち状況の分析力にも優れた彼の夫は優秀なパイロットであり、同時に同僚たちから頭一つ抜けた如才のない秀才であった。決してハンサムと言えるほどの容貌ではなかったが、彼女自身も快活で陽気な彼に好意を抱き二人は周りから祝福されて結婚した。ジョンストンは第二次大戦の南太平洋でゼロ戦を相手に勇敢に戦い多くの勲章を授与された。多すぎて軍服に付けられないほどの勲章を飾ってパーティーに出ると、彼はその一つ一つのいわれを自慢げに説明した。彼に寄り添うヘレンもそんな夫に尊敬のまなざしをそそぎながら誇らしい気持ちであった。しかしそのようなことが何度も繰り返されるとさすがのヘレンも最近ではうんざりであった。

ヘレンは夫が男仲間と武勇談の掛け合いを始めるとその場をそっと離れ、顔見知りの夫人たちが一人の浅黒い精悍な軍服姿の男を囲んでいる輪に向かっていった。

輪の中心にいた女性がヘレンの顔を見かけると手招きし、興奮した口調で呼び掛けた。

「ねえ、ねえ、ヘレン。聞いているでしょ。この方があの有名なイスラエルの武官よ。話がとっても面白いの。今始まったばかりだからあなたも一緒に聞きに行ったら。」

女性は夫の上役の夫人であった。ヘレンは輪の中心の男性に挨拶すると一歩下がって遠慮がちに彼の話の話を傾けた。話に魅了されていた女性たちは次から次へと男に質問を浴びせかけた。ここでは夫の序列がそのまま夫人たちの序列である。ヘレンが質問することなど許されない。彼女は遠慮会釈のない夫人たちのやりとりを静かに聞いていた。日頃のパーティーで話題のリーダー役を務める彼女にとってそれはある意味苦行であった。

男が話につかえると女たちが四方八方から口をはさむ。それに対して男は少し考え込んだ後、言葉少なに答える。

そのやりとりを見ながら、ヘレンは男の話しぶりに感心した。話し方は訥々としていたが説得力があった。そして何よりも感心したのは彼の話は決して芯がぶれなかったことであった。普段の周囲の男性たちの会話は目の前の相手を楽しませることばかり考え話に全く芯が無い。それに比べ目の前の男には意思の強さが感じられた。

ヘレンはそのことを彼に伝えたくてついに我慢できなくなり言葉を発した。

「あなたって本当につつましいシャイなお方ね。それでいて信念はロック(石)のように堅いわ。さしずめ『シャイ・ロック』と言ったところかしら。」

(目次)

場の空気が一瞬凍りついた。

彼女も自分の発した言葉の意味にハッと気がついて、手で口をおおった。イスラエルの、そして生粋のユダヤ人である武官に投げかけた『シャイ・ロック』と言う言葉。それがどのような意味を持つのか、彼女もその程度の常識はわきまえていたのだが、一度口に出したことは翻せない。ヘレンは蒼くなりあわてて次の言葉を頭の中で考えた。

その時、輪の中心にいた上司の夫人が、男とヘレンを交互に見ながら言った。

「まあ、面白いことを言うわね。本当にこの方はつましくて、それでいて堅いお方よね。『シャイ・ロック』とは面白い呼び名ですこと。」

「私、今後あなたさまのことをそうお呼びすることにしましょう。」

輪の女性たちはポカンとした顔になった。上司の妻は不思議な顔をした。そのことで皆は彼女がかの有名な英国の戯曲を知らなかった、或いは気付かなかったことを理解した。こうなれば彼女に合わせることも他の夫人たちの処世術である。彼女たちは一斉に声を揃えた。

「そうですね。そうしましょう。そうしましょう。今後この方のことは『シャイ・ロック』と呼ぶことにしましょう。」

第二部第二章

この出来事は瞬く間にワシントンの社交界に広まり、彼は以後『シャイ・ロック』と呼ばれるようになった。